

〈その他〉

## トインビーの『歴史の研究』への批判（二） —「文明の起源」について—

曹 未風 著・姜 寅星 訳

### 【要旨】

トインビーの『歴史の研究』では、「挑戦と応戦」の理論に基づき、文明の起源を自然および人為的環境からの刺激への応答として説明している。しかし、トインビーの学説や思想は欧米の学界から多くの批判を受けた。中国では1949年以前、彼の学説や思想は高く評価されていたが、政治的イデオロギーの転換により、1950年代以降は反共的と見なされ、批判の対象となった。『歴史の研究』を中国大陸で初めて翻訳した曹未風は、1958年から1959年にかけて批判論文を執筆し、トインビーの学説が神話的直観に依拠し、歴史的事実の解釈に主観性が強く、宿命論的であると指摘した。また、彼の思想にはシュペングラー、ユング、バルクソンの影響が色濃く見られ、神学・心理学・神話を混合した方法論が特徴であると批判している。

キーワード：トインビー、挑戦と応戦、環境、文明

### 1. 訳者まえがき

本訳稿は、上海社会科学界聯合会の学会誌『学術月刊』<sup>1</sup>（1958年・第10期）に掲載された、曹未風<sup>2</sup>（1911-1963）による「アーノルド・J・トインビーの『歴史の研究』への批判（二）」の全訳である。20世紀の学者アーノルド・J・トインビー（Arnold J. Toynbee, 1889-1975）は、1934年に『歴史の研究』（A Study of History）の第1巻から第3巻を刊行し、その後27年をかけて1961年に第12巻で完結させた。この大著の刊行により、トインビーは1947年にアメリカの『タイム』誌の表紙を飾るなど、世界的な名声を得る一方で、多くの批判にもさらされた。批判は主に欧米の人文社会科学界、特に歴史学界から寄せられた。なかでも著名なのが、オックスフォード大学の歴史学者ヒュー・トレヴァー＝ローパー（Hugh Trevor-Roper）によるもので、彼はトインビーを「預言者」と揶揄し、『歴史の研究』を一種の「聖書」として皮肉ったことで知られている<sup>3</sup>。

アジアにおいても、トインビーの思想および『歴史の研究』に関する紹介と受容には長い歴史がある。特に1950年代から1960年代にかけては、日本や台湾で彼の名声が非常に高まり、学界でも多くの論考が発表された<sup>4</sup>。

一方、中国では、トインビーの著作が1918年にはすでに翻訳・紹介されており、1949年以前には人文社会科学界の多くの学者が彼の学説や『歴史の研究』を高く評価し、積極的に紹介していた<sup>5</sup>。しかし、何らかの理由により『歴史の研究』そのものは中国語に翻訳されることはなかった。

トインビー思想の中国語圏における具体的な伝播過程については、李孝遷による「トインビー『歴史の研究』中国における翻訳と伝播」が包括的に論じており、新資料の発掘においても参考価値が高いため、ここでは詳しい言及を控える。1949年以降、中国の政治環境が大きく変化したことにより、かつてトインビーの著作や学説を積極的に紹介していた学者たちも含め、彼の理論や『歴史の研究』に対する批判的な論文が次々と発表されるようになった。その背景には、当時の中国がソ連の学術的影響を強く受けていたことがあり、トインビーが反共・反ソ的な立場にあると見なされたため、批判の対象となったのである。

これらの批判的論文には、資本主義的イデオロギーに対する否定的な政治的言説が多く含まれ、政治的スローガンも頻繁に用いられている。『歴史の研究』の抄訳版（D.C.ソマーヴェル編）も、批判的研究の必要性から、1959年に当時の上海市高等教育局副局長であった曹未風をはじめとする複数の学者によって初めて翻訳・出版された。ただし、この抄訳版は主に学術界内部での批判的研究の資料として用いられたため、一般には広く流通することはなかった。

翻訳者である曹未風は、1958年および1959年に、二回に分けて『歴史の研究』に対する長編の批判論文を執筆している。その内容には、政治的な言語が多く含まれているものの、トインビーの歴史叙述における方法論、学説（例えば史料の不確定性や歴史の定式化）に関する議論には一定の学術的価値が認められる。したがって、本訳文は、トインビー学説や思想の研究の資料として、1950年代末の中国における史的唯物論に基づくトインビー学説の研究論点や批判の様相などをみることができる。

## 2. 翻訳原稿

### トインビーの『歴史の研究』への批判（二）

—「文明の起源」について—

曹 未風 著・姜 寅星 訳

—

トインビーの歴史理論の第一部分は、彼の「文明の起源（The Geneses of Civilizations）」に関する学説である。彼の説によれば、これまで世界には合計二十一個の文明が出現しており、そのうち六個は第一世代に属するものである。すなわち、これら六個の文明は原始社会から直接的に発生したものである。原始社会は静的な状態にあったが、現在もなお静的な状態である。

原始社会の数ははるかに多く、彼らの調査・登録によって確認されたものだけでも、六百五十個にも上るといふ。では、なぜこの六個の社会のみが文明社会になり、他の社会は文明社会にならなかったのか？また、この六個の文明社会の出現後、その後に次々と十五個の文明が出現したというのはどういうことなのか。トインビーのこの学説は、まさにこれら二つの問題に対する解答を提示するものである。

トインビーは自身の主張を述べる前に、二つの学説を批判した。一つは「種族説」で、もう一つは「環境説」である。彼は、文明の起源はある種族が他の種族よりも生まれつき優れているからでもなく、またその種族が住む自然環境が特に快適で文明の発生に特に有利だからでもないと考えた。続いて彼は、自らの学説である、いわゆる「挑戦と応戦」(Challenge and Response) という学説を提示した。

彼のこの学説は、どこから来ているのか？それは歴史の研究からでもなく、客観的な調査からでもなく、むしろ神話の啓示から、また靈感から生まれたものである。ある時、彼がゲーテの『ファウスト』を読んでいた際、エホバと悪魔が賭けをするという箇所を読んだとき、突然啓示を受けた。彼はこう考えた：“もしエホバが創造した世界が完全無欠であるならば、悪魔などどこにいるというのか？悪魔がいなければ、‘挑戦’などどこにあるというのか？”したがって、彼は文明の起源は「挑戦」によって生まれたと考え、悪魔もまた神の意思であると見なした。ここで彼は、さまざまな神話の例を挙げ、また中国の「陰陽」を例に挙げた。彼は、宇宙はもともと陰であり、そこに陽が現れたことで、陰と陽、すなわち“挑戦”と“応戦”が生じ、変化が始まったと考えた。これらすべては神の計らいによるものである。ここでは、トインビーは最初の六個の文明の例を挙げ、自らの学説の証拠としている。具体的な歴史の過程において、「挑戦」とは何か？トインビーによれば、挑戦には二種類があり、一つは自然環境によるものであり、もう一つは人為的環境によるものであり、総じて「環境的な挑戦」と呼べるものである。最初の六個の文明においては、自然環境からの挑戦しかなかったが、残りの十五個の文明には自然環境と人為的環境の両方の挑戦があった。これら二種類の環境を合わせ、彼はその形態の違いに応じ、五つの「刺激」と呼ぶものを分類した：(一) 困難な環境による刺激、(二) 新しい環境による刺激、(三) 打撃による刺激、(四) 圧力による刺激、(五) 懲罰(不幸に遭う)による刺激。トインビーによれば、挑戦こそが文明の起源を生み出す刺激である、そのため、すべての災難は「美德」であり、すべての不幸は幸福である。天災、人災、侵略、虐殺、圧迫、奴隷化、障害や傷害なども、歓迎されるべきものと見なされる。

しかし、挑戦には限度があるべきであり、あるいは両端に境界があるべきだとも言える。一つは挑戦の強度、すなわち十分な強度と強度が弱すぎる場合の境界で、挑戦は、一定の強度に達してはじめて「成功した応戦」を引き起こすことができる、強度が足りなければ挑戦は無効となる。もう一つは、挑戦の強度、すなわち十分な強度と強度が強すぎる場合の境界であり、一定の強度を超えると、挑戦と応戦の双方の力に差が大きく、「成功した応戦」をも起こり得ない。したがって、トインビーは「中庸の道」という理論を提起した；天災、人災、侵略、虐

殺、圧迫、奴隷化、障害や傷害などは、なくてはならないが、過剰であってはならない、まさに典型的なイギリス人的な欺瞞的論調である。

自らの主張を証明するために、トインビーは多くの歴史資料を引用している。例えば、彼は古代エジプト文明の起源は、アフリカ北部の土壌が風化したことにあると述べている。自然環境が変化したことにより、当時のアフリカの人々はこの挑戦に対し、様々な応戦策を取った；一部分のひとびとは生活様式を変えることを拒み、原地に留まったため、大量に死亡した；一部分のひとびとは生活様式を維持するため、南方へ移住せざるを得なかったが、いまだに文明社会に入っていない；一部分のひとびとは風化した土地で暮らすため、生活様式を変え、遊牧民となった；一部分のひとびとは居住地を変え、ナイル川デルタに移住し、生活様式も変え、農民となり、古代エジプト文明を創造した；また一部分のひとびとは海を渡り、ミーノース島（クレタ島）に到達し、ミーノース文明を創造した；この文明は後に古代ギリシャ文明を生み出すこととなった。これがトインビーの文明起源に対する見解である。彼は問題を完全に表面的、すなわち「形態」から捉えており、事物の本質には触れていない。私たちは知っている一文明の起源は、自然環境からの挑戦によるものではなく、人類が自然と闘争した結果である。人間が人間となり、文明が出現したのも、まさに人類が自然界との闘争の過程で勝利を取めたことによるものである。文明は自然界の「挑戦」によって生まれたのではなく、人類の労働によって創造されたものである。トインビーはここで因果関係を逆転させただけでなく、自らの主観的な想像による体系を、歴史の発展法則の代わりに用いている。彼は人間と自然環境との闘争において、自然を主体と見なしているため、人類の運命は一貫して受動的で悲惨なものとする。ここにおいて、彼は深刻な「宿命論」の色彩を帯びている。

## 二

上で挙げたのは、彼が言う自然環境が、「第一世代」文明に挑戦を与える例、すなわち彼の言うはじめの二つの刺激である。次に、彼が言う「人為的環境」が人類に挑戦を与える例を挙げてみよう。第二世代文明や第三世代文明は、第一世代文明と「親族」のような関係を持ち、その起源においてもなお「人為的環境」が挑戦の役割を果たしている。これが彼の言う後半の三つの刺激である。トインビーの学説はこの部分においてすでに歴史科学の範囲を超え、政治の領域にまで踏み込んでいる、彼の多くの主張は、悪意に満ちているだけでなく、反動的でもある。

「人為的環境」の範囲内で、彼は三つの刺激を分類している：打撃、圧力（抑圧）、及び懲罰（不幸な遭遇）である。彼は、これらの状況が文明社会の起源を促す力（すなわち彼の言う「挑戦」）であると述べている。しかし、彼はこの問題を説明するために、どのような歴史的事実を用いたのか？例えば、打撃という刺激を説明する際に、第一次世界大戦後の歴史を例として挙げた。彼は、1930年代にヒトラーのナチス反動勢力が出現したのは、1918年にドイツが敗戦し、さらにフランスが1923年から1924年にかけてルール地方を占領したことが要因

であると考えている。これはまったくの荒唐無稽である。圧力という刺激を説明する際に、彼は古代エジプト史、古代イラン史、ロシア正教史、西欧の中世史および近代史における多くの例を引用した。彼は、オスマン帝国がウィーンに侵犯したことが、オーストリア＝ハンガリー帝国の出現を促したと述べている。ここでは、文明と政権を再び混同している。オスマン帝国の滅亡については、彼は終始明確に説明せず、ただオーストリア＝ハンガリー帝国が滅亡したのは、トルコ人がウィーンを攻撃しなくなったからだと述べている。経済的な要因についてはまったく触れられておらず、民族運動についても軽く触れただけである。懲罰（不幸の遭遇）の刺激については、もっと奇妙なことを述べている。彼は、足が不自由であることや盲目であることが、特殊な才能を発展させる好条件であると考えていた；奴隷制度は宗教的信仰を発展させることができ、もしかするとキリスト教の将来はアメリカの黒人教会に完全に依存するかもしれないとした；様々な形で奴隷化され迫害された人々が、例えば、中世にコンスタンティノープルに住んでいたギリシャ人（Phanariots）、帝政ロシア時代にヴォルガ川流域に住んでいたカザンリ人（Qazanlis）、およびオスマン帝国の支配下にあったローマ・カトリック教徒（Levantines）、またユダヤ人など、彼の見解では、これらの人々が、様々な形の迫害の中で自らの「才能」を発展させ、自らの「文明」を創造したとされる。これらの主張は、歴史に少しでも常識を持つ者にとっては、理解しがたいものである。しかしながら、トインビーは、まるで歴史学者然とした態度で、典拠を引用しながら「科学的研究」を行い、さらに「結論」を導き出している。これはなぜなのか？この理屈は、今日の我が国の読者にとっては極めて簡単で、極めて容易に理解できるものである。なぜなら、トインビーの歴史の研究は、歴史科学が社会科学の一部として反動的階級の道具であることを随所に示しており、著者自身の階級的視点と立場を随所に反映しているからである。トインビーはブルジョア階級の代弁者であり、彼の著作はブルジョア階級のために奉仕している。したがって、彼のすべての理論はブルジョア的な視点と立場から出発し、資本主義および帝国主義の社会制度に奉仕するものである。事実の真相を思想的に曖昧にし、人民の意識を麻痺させるために、彼は歴史の真実を歪曲するだけでなく、多くの捏造さえも行っている。これらすべては、彼の著書の中で容易に見つけることができる。

### 三

トインビーのこれらの見解は、いったいどこから来たのであろうか？彼の階級的出自が根本的な要因であることのほかに、加えて彼自身に特有の形成過程が存在している。1948年に彼は論文集『試練に立つ文明（Civilization on Trial）』を出版した。その冒頭の文章は「私の歴史観（My View of History）」と題されている。この中で、彼は次のように述べている：

“……私自身の歴史観を説明しようとするならば、その由来、発展、そして社会的・個人的背景についても明らかにする必要がある。……私は幼少期から旧式の教育を受けてきた。……学んだすべては、ギリシャ語およびラテン語の古典文献である。……私はこのような教育

が、歴史学者を志す者にとって、かけがえのない宝であると考えている。……現存するギリシヤ・ローマ史の資料は、量的に多すぎも少なすぎもせず、またあらゆる面でも均衡が取れている。……これによって、歴史家にとって不可欠な「正しい比率感覚 (Sense of Proportion)」を養うことができる。……さらに、ギリシヤ・ローマ史を学ぶ最大の利点は、人間に狭隘な視野ではなく、広範な視点を育むことができる点にある。……

……私はギリシヤを徒歩で旅していたとき……私はカフェで初めて (イギリスのいわゆる) 外交政策というものを耳にした。しかしその時でさえ、私は、私たち自身も歴史の中に生きているということには、まだ気づいていなかった。……大戦が勃発し……私は (古代ギリシヤの歴史家) トウキディデス (Thucydides) の著作を読み返したとき……彼と彼の同時代人が経験した歴史が、まさに私たちが今体験しているものと同質であることに初めて気づいた ; このようにして、事実上、彼の「現在」は私の「未来」となったのである。……もしギリシヤ・ローマと西洋 (現代) 文明との関係が本当にこのようなものであるならば、すべての文明の間の関係もまた、同様のものなのではないだろうか?……

このようにして、人類社会の歴史としての文明とは、同一時代に属するいくつかの「平行体」である。(過去五千年から六千年の間に)、人類は二十回ほど数十万年にわたって眠り込んでいた原始的な状態を克服しようとする試みを行ってきた。一部の地域では、例えばニューギニア (New Guinea)、フエゴ地方 (Tierra del Fuego)、およびシベリア北東部などには、今日に至るまでなお原始的な状態が続いている……この差異の所在こそが……「宇宙の謎」を解く鍵となる可能性がある。

……1920年、ナミエ教授の紹介で、私はシュペングラー (Spengler) の『西洋の没落』という書物を読むことになった。この天才的な歴史的予見に満ちた著作を読んだ後、私は自分の問題がすでに彼によって解決されたように感じた。私の一つの主張は、歴史研究の対象は社会 (文明) であるべきだということであり……もう一つの主張は、すべての社会 (文明) は同時代的であり、かつ平行して存在しているということである……この二点について、彼は言及していた……しかし、私がさらに文明の起源について探究しようとしたとき、そこにはまだ多くの仕事ができることに気づいた ; 私の見解では、シュペングラーはこの問題に対してあまりにも教条的であり、しかも「宿命論者」である。彼の見解によれば、文明の起源、発展、衰退、そして消滅は、すべて一つの不変の時間表に従って進行するものであり、……しかも、これは自然法則であるとまで断言している……理由は不要であり、「創造主」さえ信じればよいというのである……しかし、私はここでは民族的伝統の違いに注意を払うべきだと考える。……(しかし) もし当時、ユング (C.G. Jung) の著作を知っていたならば、私は彼から何らかの啓示を得ることができたかもしれない。私の啓発は、ゲーテの『ファウスト』から得られたものである、……

ゲーテの『ファウスト』における「天上の序曲」の冒頭では天使たちが声を揃えて、神の創造の完全無欠を讃えている。もしかれの創造が本当に完全無欠であるならば、そうすると、こ

の創造主にはもはやさらなる創造を行う可能性は残されていないことになる……そこでこうしてメフィストフェレス (Mephistopheles) が登場し、神に挑戦する。彼は神に対して、思う存分破壊を試みることを許す覚悟があるかどうかを問いかけるのだ。……このようにして、挑戦者と応戦者という形で二人の人物が現れることになる……悪魔は必ずしも常に失敗するわけではない……もし文明の起源が挑戦と応戦によるものだとすれば……その文明の衰退 (逸脱) や死も、同じ理由による可能性があるのかもしれない。……

文明が死に至る一般的な状況とは社会の中に徐々に規律を失いつつある“無産者”と徐々に統治能力を失いつつある“少数者”が現れることになる。死の過程は単調な下り坂ではなく、そこには起伏がある……最後の“伏”の直前、統治する“少数者”は“統一国家”という手段を用いて、一時的に“平和”の局面を維持しようとする。(しかし) このような“統一国家”の内部では、“無産者”がむしろ“統一教会”を創出することになる。この文明が最終的に崩壊したとき、“統一教会”はまだ存続し続け、ほかの新たな文明を育む種子となる……(このようにして) ある文明の死は、別の文明の誕生を促すことになる……。

この一節から見て取れるように、トインビーの歴史観にはいくつか注目すべき現象がある。彼が歴史科学の分野におけるブルジョワ階級の代弁者であることは、もはや言うまでもない。また、彼は歴史学者を育成する旧式の教育制度の崇拜者であり、同時に彼は自身の方法を他者にも倣わせようとすることを広めようとしている。彼にとって、ギリシャ史とローマ史は疑いなく歴史研究の模範である。この点については、彼は他の多くの文章でも言及しており、そして、常に自らをギリシャ・ローマ史の専門家であると誇っている。

しかし、彼のいわゆるギリシャ史やローマ史は、ギリシャ史やローマ史そのものではなく、単にそれらに関する歴史書物にすぎない。このような人物に対して、我々が彼に現実から出発することを期待するのは、当然ながら無理である、それにしても、彼が完全に書物から出発しているとは、我々にとってもすこし意外である。彼はギリシャ・ローマ史の現存する資料は、量的に多すぎも少なすぎもせず、あらゆる面でも均衡が取れているため、研究に便利であると主張している。このような言説は、実際には別の問題を示している。すなわち、それはトインビーの思考方法における根本的な問題である。なぜなら、彼は歴史的事実から出発して研究を通じて結論を導き出すのではなく、主観的な概念から出発し、自らのいくつかの枠組みに歴史を当てはめているのである。さらに、神学的・生物学的な仮説や現象を持ち出し、神・人・物の“三界”を完全に混同している。そのため、我々は彼の“名著”を読み進めるにつれ、ますます混乱し、ついには彼が何を語っているのかさえ分からなくなってしまう。トインビーのこの『歴史研究』が西欧やアメリカでこれほどまでに名声を博していることから見ても、彼らの歴史科学における学術界の水準がいかに低いかを十分に証明していると言える。まるで彼らが今なお中世の蒙昧な状態にとどまっているかのような印象さえ受ける。

ここで彼は、自らの“師”としてシュペングラーおよびユングに言及しており、文明の起源

という点においては、自分がシュペングラーを超えると自認している。ユングについては、デンマークのキルケゴール（Kierkegaard）と同様に、現代の主観的唯心論哲学の“著名人物”とされており、彼らもまた心理分析の手法を用いて、あらゆる社会科学、生物学、医学上の現象を分析している。フロイトの心理分析学説が第二次世界大戦の前後にアメリカと西欧で特に流行して以来、ブルジョワ的学術界において、特に社会科学や文学・芸術の分野では、これは絶望の中で死に瀕しながら狂気じみたもがきを見せる一種の逆流である。

これら以外にも、トインビーの思想にはもう一つの源泉がある。これこそがベルクソン（Bergson）である。このフランスの主観的観念論者の名著『創造的進化』（L'évolution créatrice）は、トインビーの著作の中に直接現れないが、しかし、ベルクソンの思想と論点は彼の全体的な見解に深く染み渡っており、彼の取捨選択の基準に影響を与え、思考の方向性を啓発し、さらには文章の文体にまで影響を及ぼしている。なぜなら、トインビーがまだオックスフォード大学の学生であった時代、ベルクソンの学説は一世を風靡していたからである。ベルクソンは、人間が外界を認識する過程において、“自然な歪曲現象”が存在すると考えており、この問題を解決するためには、進化論、心理学、そして人間自身の最も深い直観（Intuition）が必要であり、これらすべてを彼は「創造的進化の認識過程」と総称している。彼は認識と客観世界との間には常に距離が存在し、そのため客観世界は認識不可能であり、人間の認識とはすなわち直観であるとする。方法論においても、ベルクソンは多様なアプローチを主張しており、生物学的手法、宗教的手法、心理学的手法、さらには神学・神話学的手法までもを同等に用いることができるとする。これらの考え方を、トインビーはすべて受け入れたのである。

ある程度において、トインビーは現代のブルジョワ歴史学界の“集大成的な人物”である。彼は膨大な書物的知識を有し、トゥキディデスからギボン（Gibbon）の『ローマ帝国衰亡史（The Decline and Fall of the Roman Empire）』に至るまでの古典歴史学派の視点と方法論を継承するとともに、現代の主観的唯心論的哲学の立場も取り入れている。彼は過去を継承しただけでなく、未来への道を示す案内者、「歴史の法則」を発見し、人類の発展の行方を指し示す予言者として登場している。このような人物に対して、我々は暴露し、厳しく批判を加えなければならない。

以上のすべてに加え、トインビーにはもう一つ重要な側面があり、特に強調して指摘する必要がある。それは、資本主義社会が今日の死に瀕した帝国主義段階にまで発展した時点で、トインビーが単なるブルジョワ階級の代弁者ではなく、帝国主義的独占集団の代弁者であるということである。彼の職歴を見れば、彼はまさに非常に古参で経験豊富かつ老練な情報工作員である。第一次世界大戦以前から、彼は英国外務省で情報活動に従事しており、その後も一貫して情報局の局長を務めた。二度の世界大戦の前後においても、彼は極めて活発に活動しており、ほぼすべての重要な国際会議や国際条約の策定作業に参加した。そのほかにも、彼は長年にわたり英国国際関係学会の会長職を務めながら、世界各地を頻繁に訪れ、自ら“調査研究”

を行い、情報収集に努めてきた。このように、トインビーという“学者”は、実のところ二重の顔を持つ人物であった。一方では、長年にわたり大学で“教授”として教鞭を執る“大学者”であり、他方では、同様に長期にわたり、あるいはそれ以上に長く、情報活動に従事する実際の政治的陰謀家でもある。トインビーの実像を理解するためには、この二つの側面から彼を捉える必要がある。しかしながら、トインビーを批判する一部の論者は、「学者」としての側面しか見ておらず、「政治的陰謀家」としての側面を見落としている。そうでなければ、なぜトインビーがこのような「学術著作」の中で、現代の政治生活の諸問題についてこれほど熱心に論じ、しかも社会主義や共産主義を悪意をもって歪曲し、ソ連およびソ連に関連するすべての事象を直接的に攻撃しているのか、その理由を説明することはできない。この問題については、次章すなわち「文明の成長」において、彼の主張がさらに露骨に表れている。

### 【注】

- 1 訳者注：『学術月刊』は、1957年に上海市社会科学界連合会の機関誌として創刊された。文化大革命期には一時休刊を余儀なくされたが、1979年に復刊されている。掲載される論文は、マルクス主義理論をはじめ、社会学、哲学、経済学、文学、歴史学、政治学、法学など、人文社会科学の幅広い分野を網羅している。現在では、“新中国成立以来60年で最も影響力のある学術誌の一つ”として高く評価されている。なお、曹未風はかつて『学術月刊』編集委員会の常務委員を務めていた。
- 2 曹未風（1911～1963）：本名は曹崇徳。浙江省嘉興出身。1930年代には上海の培成女子中学校で教務長を務め、大夏大学では教授および外国語学科主任を兼任したほか、暨南大学や光華大学でも教鞭を執った。1931年前後からシェイクスピア劇の翻訳に取り組み、その後イギリスに留学。1943年から1945年にかけては貴陽の文通書局に勤務し、『ヴェニス商人』をはじめとする11作品を翻訳、同書局より《シェイクスピア全集》として出版された。1945年以降は上海に戻り、商務印書館出版部の部長を歴任。1949年以降は、華東軍政委員会教育部高等教育処副処長、上海市高等教育局副局長、上海市外国文学協会副会長など、教育・文化分野の要職を務めた。出所：  
<https://baike.baidu.com/item/曹未风/5723272>
- 3 汪荣祖 2006『史学九章』（生活・読書・新知三聯書店）PP.56-57
- 4 汪荣祖 2006『史学九章』（生活・読書・新知三聯書店）P.39
- 5 李孝遷 2011『中国におけるトインビー「歴史の研究」の翻訳と伝播』

# Critique of Toynbee's A Study of History (Part II): Regarding The Origin of Civilization

Yinxing Jiang

## Abstract

In Toynbee's A Study of History, he explains the origins of civilization as responses to stimuli from both natural and human-made environments, based on the theory of "challenge and response." However, Toynbee's theories and ideas faced significant criticism from the academic world in Europe and America. In China, prior to 1949, his theories and ideas were highly regarded. However, due to a shift in political ideology, they were deemed anti-communist after the 1950s and became targets of criticism. Cao Weifeng, who first translated A Study of History in mainland China, wrote critical essays in 1958 and 1959, pointing out that Toynbee's theories relied on mythical intuition, were highly subjective in interpreting historical facts, and were fatalistic. He also criticized Toynbee's thought for being heavily influenced by Spengler, Jung, and Bergson, characterizing his methodology as a mixture of theology, psychology, and mythology.

Keywords: Toynbee, Challenge and Response, Environment, Civilization